

山と博物館

第18巻 第4号

1973年4月25日

大町山岳博物館



中国へ贈られるカモシカの歓送会

撮影 山本 博 幸

新任のご挨拶

四月六日付をもって市立大町山岳博物館長に補せられましたので、ご挨拶を申し上げます。皆様のご叱正とご協力をお願い申し上げます。大町山岳博物館は昭和二十六年十一月三日に創設されてから、今年で二十二年目を迎えるようとしています。この間、博物館をとりまく社会の状況は大きく変わりました。第二次世界大戦後の混とんとした世相の中で生まれた博物館は、高度経済成長の時代から、環境や資源問題がクローズアップされる現在まで地域社会と共に歩みつづけてきました。そして、大町市の皆様方をはじめとする多くの方々の深いご理解とご支援をいただきながら、社会教育施設として、また、他方では観光施設として、両面性と特殊性を共存しながら今日に至っています。

ところで、最近では情報化社会など言われます。テレビをはじめとする発達したマスメディアによって、莫大な情報量に囲まれた生活が営まれ、さらに科学技術の発達は、日常生活を非常に便利なものになりました。居ながらにして世界の動きや、生活をとりまくすべての現象を知ることができ、頭の中で情報を寄せ集めることによって、現象の概念的な理解が可能になります。しかし、情報の大部分はいわゆるコピーされて伝えられるものであり、ものそのもの、あるいは現象そのものものではありません。

博物館はもの(現象)と人とを結びつける教育施設であると考えられますが、コピーされた情報が増大する時代には、「本物」をじっくり見つけて考える、という博物館の使命がますます重要になって行くものと思います。

今まで当館の運営にあたり、数多くの人達から多大な協力とご助力をいただいておりますが、何卒今後ともどしどしご叱正をいただき、特色ある山岳博物館発展のためにご協力あらんことをお願いいたします。着任のご挨拶といたします。

(平林国男)

カモシカを中国へ贈るの記

千葉 彬 司

中国へ親善使節として贈られる予定であった、カモシカの刺傷事件では文化庁をはじめ環境庁、上野動物園、一般市民、その他多くの方々にご迷惑をおかけし、誠に申しわけなく思い深く反省しています。

事件後、多くの市民をはじめ各地の方々からお見舞やらはげましのことをばいただき、関係者、職員一同たたく恐縮するばかりでした。

木曾生と町子に代って太郎と辰子が、去る四月三日に中国に向けて出発し、その後北京からの連絡でも至極元気ということでした。

今まで寄せられたご好意に感謝しつつ、ここにその概略を報告させていただきます。

一、パンダの返礼大使

昭和四十七年十月六日付の新聞には、パンダの返礼大使は「ニホンカモシカ」と大きな見出しで報道されたのはご承知の通りである。

その報道された記事を私たちはどうかつにも見落して、神奈川県立博物館の高橋秀男学芸員から連絡をいただき、新聞をひっくりかえしてみつけたというのが実情である。

飼育カモシカについての現況、あるいは調査・研究についての総合的な会議、いわゆる「カモシカ会議」は年に一回、上野動物園の中で開かれており、各施設ごとにカモシカの飼育頭数などが報告されることになっている。

新聞に報道された時点で、上野動物園がカモシカを飼育しているという情報を私たちは得ていなかった。

浅野園長（当時、同年十二月に勇退されている）が上野で持っていないと思われるニホンカモシカを返礼大使に提案したことについて、どのような意図で発言されたのか、私たちの興味をひくところとなった。



保護直後の辰子、はらまきをさせている 1972.3.15

べくもなかった。それではカモシカの国際登録の登録責任者 (Safeguard Keeper) である多摩動物園の小森厚係長にたずねてみようということになった。カモシカが海外へ出るのは今回がはじめてのことであるから、国際登録の責任者ならばあるいは記事以外の情報が得られるのではないかと思っただけである。

だが、電話の小森係長の声はいささかまとどつたようすのもので、園長の提案発言については、事前に何も聞かされていないし、園

長自身も提案があまりに大きくとりあげられどこのカモシカという具体的な裏づけのない発言なので困惑しているのではないだろうかというような内容であった。

小森係長には、もし上野が困るようであれば、うちの方でも協力することができるとも知れないとお伝えして電話を切った。

その後、カモシカについてははっきりした進展はなく、上野動物園からカモシカ寄贈についての正式要請があったのは、暮もおし追った十二月二十三日のことであった。

その間、マスコミでは、大町のカモシカが贈られるのではないか、あるいは日本カモシカセンターのものが候補に上っている、または、新潟県の笠堀ダム周辺にすんでいるカモシカを捕獲して贈りたいと田中首相に陳情したなど、多くが報道されたが、どこのカモシカが贈られるかは、いずれも憶測の域をでるものではなかった。

市側に正式要請があつて、二十五日に上野と大町で同時発表ときまつた。その日は大町市議会の最終日でもあり、大町のカモシカが中国へ贈られることに決定したことが市長から議会に報告された。

二、木曾生と町子

私たちは、要請と同時に候補選びをはじめた。

健康状態、将来繁殖が充分可能なカモシカということで、木曾生（大町十四号）、町子（大町十二号）が最適であろうと考えた。

木曾生は昭和四十五年五月二十四日、木曾郡南木曾町で、生後約三十日で保護され、人工哺育で育った。

人工哺育で育つたので人にはよく馴れているが、飼育係以外の人が放棄園に入ると攻撃してくることがある。

後で、中国へ贈られるカモシカを撮影しようとして柵を乗り越えて入った人を攻撃したため棒でなぐられ、右眼を失明してしまふ結果となるのだが……。



生後19日目の太郎と両観 1970.6.16

町子は昭和四十六年五月二十日に出生した大町での繁殖第二号である。

他のカモシカに比べスマートに見えるのは足が長いめか知られない。母乳で育つたカモシカで、多分に人見しりをし、飼育係でさえ五メートル以内は近づけようとしない。

木曾生と町子は、中国へ贈られることが決定する以前から、ツガイにしようと考え、同一放棄園内で飼育されていたが、気があうのか争うような場面はなかった。

贈られることが決まると、以前に増して健康状態には注意を払うようにした。

閉鎖された放棄園では、しばしば内部寄生虫に犯され頭を悩ませたので、長野県松本家畜保健衛生所や赤羽孫七獣医のご援助で、詳しく寄生虫の検査をしていただき、横沢壇治獣医によって数回にわたって駆虫を施した。

中国へは三月下旬を目途に作業を進めているとの上野からの連絡で、二頭のカモシカが簡単に収容できるようにと、隔離舎へ自由に入るように訓練をはじめた。

三、木曾生の負傷

木曾生・町子は検疫のため上野動物園へ移されることになり、その日は三月二十五日と決った。

そして、中国へは大相撲が発券する、四月二日の特別機に乗ることになった。

三月二十二日、私たちは朝から二頭を送る歓迎会の準備に追われていた。送り出す日が迫るにつれ、報道関係者の取材も多くなり、私たちはその応待に、また準備にとせわしい日々であった。

その日の午後二時二十分頃、外で片づけ仕事をしていた館長に、動物園の観覧者が知らせてくれた。

「町子の目から血が流れている」と、……館長の知らせに私もびっくりして、放養園に駆けつけた。目から血を流しているのは、町子ではなく木曾生の方であった。

私は柵内に入って近くから木曾生の眼をみると、眼から血があふれ、外見から負傷の程度はわからなかった。

とに角、獣医に手当してもらわなければならぬ。私は事務所の電話へと走った。

運悪く獣医は自宅にはいなかった。会議先に連絡をとり、館へ来ていただいたのは、四時すぎであった。

診察の結果は、鋭利なもので眼をついたような傷で、失明はまぬがれないだろうということであった。

忙しい中にも静かに着実に作業を進めてきた私たちの館は、この時点からてんやわんやの大ききわぎとなった。

事件の起ったのは、十二時三十分から二時二十分頃までの間である。

十二時三十分までは取材協力で、私は木曾生と一緒に何も変化は認められなかったのであるから、この間、一時間五十分たらずの間に思しい事が起ったわけである。

同時に緊急対策会議が開かれたが、後三日と



仲睦まじい太郎(左)と辰子 1973.3.24

予定日が迫っている上に、相手のある問題だから、こちらの意向ばかりで進めることは不可能である。

事件の発生とピンチヒッターの起用等の連絡で石内上野動物園長、中川飼育課長に電話をしてもなかくつかまらず、連絡がついたのは十二時すこし前であった。

そして、何よりも私たちをほっとさせたのは、ピンチヒッターの起用の了解がとれたことで、不幸中の幸いであった。

会議は引き続いてピンチヒッターの選定へと進んだが、この間にも、警察関係、報道関係の出入りが激しく、蜂の巣をつついたような状態の中で、最終的に太郎、辰子が選ばれたのは午前一時過ぎである。

太郎は大町での繁殖第一号で町子の兄にあたり、性質はおとなしく、やや気の小さなところのあるカモシカである。

辰子の方は、上伊那郡辰野町で生後約十カ月位で保護され、博物館で育てられたのであるが、太郎に比べて気の強いところがあり、

飼育係でも気に入らない時には、前足で地面を打ちならして威嚇することがある。

年令的には、木曾生、町子と変わらぬ三才と二才なので、将来繁殖は充分できるとみている。

後日、木曾生を負傷させたアマチュア・カメランが自首してきたことを、私は上野動物園に知った。

四、上野動物園へ

ピンチヒッターとして太郎と辰子が選ばれると同時に、私たちは、カモシカ園の二十四時間警備対策をたて、メンバーは職員、関係者で構成され、それは二十五日の出発の時点まで実施された。

翌二十三日早朝、今まで別々の放養園で飼育されていた太郎、辰子を一緒にすることを試みた。

別々に飼育されていたといっても、金網一枚へだてただけなので、全然の初対面というわけではなかった。

それでも万一のことを考えより慎重にと、報道陣、あるいは一般観覧者にもご協力的にだいて、カモシカ園の入口をシャット・アウトした。

それまで太郎とツガイ状態にあった和歌子を別の放養園に誘導し、太郎の放養園に辰子を入れた。

二頭ともはじめは落ちつかず、興奮して園内を走りまわり、遠くから見守る私たちをはらはらさせたが、昼頃には落ついて馴んできたようであった。

翌日にはこの二頭は同じ餌箱に仲よく首をつっこむほどになっていた。

職員と関係者は二十四時間パトロールと、捜査の警察官への情報提供、報道関係者の応待、歓迎会の準備のやりなおし、書類の手続き変更等で、気持はいらだち、怒りっぽくなっていた。

翌日の歓迎会の準備が一段落したのは二十四日も遅くであった。



関係者の手で車に移される 1973.3.25

二十五日、午前五時三十分、二頭を餌が与えられ、約一時間後に輸送箱への収容作業が始められた。

この作業には職員と関係者、それに前日大町に到着された上野動物園の田代和治係長、吉野重雄技師が立ち会われ、七時には無事終了した。

昨日の午後から気温が急に下がりはじめ、チラチラ雪が舞っていたのが、今朝は横なぐりの風に雪が混り、歓迎会の行なわれる館庭はうすすらと雪化粧をしている。

午前十時、横なぐりの雪の中で、多くの来賓、関係者が集まり歓迎会が行なわれ、同四十分、拍手に送られ太郎と辰子は、上野動物園差しまわしの小型トラックに移された。

今までもすみなれた放養園を後に、多くの人々に見送られ上野動物園目指して出発したのは十時四十五分であった。

小型トラックは先導車に守られて、時速五十〜六十キロでひた走り、上野動物園の検疫舎に着いたのは午後七時二十分、輸送時間約



市長のメッセージ、贈呈目録をパイロットに託す

八時間三十五分、その間数回休息をとり、私たちはカモシカの健康状態を観察した。
 八時には金網をへだてて隣合せの飼育舎に別々に収容された。輸送中太郎はほとんど坐ったままであったが、辰子は立ったり坐ったり落つかなかつたので、大部疲れているのではないかと心配したが、舎内の辰子は意外に元気なので安心した。
 輸送中の疲れや環境に馴れなくストレス気味でもあるだろうと、その夜の給餌量はぐつと押えた量を与えた。
 翌朝七時、彼らはコンクリート床の上をコツコツと落つきなく歩きまわっている。
 辰子の方は飼料をペロリと平らげてあったが、太郎は全然手をつけてない。
 検査舎の上空をカラスが飛び、その影が写るとビクッと体をふるわせる。
 また隣の区画に入っている、カモやサギ類の動きが気になるらしく、そわ／＼しては聞き耳をたて、ウミネコが騒々しくさわぎだすると、とび上って奥に逃げこんでしまった。

石内園長(右)と江津助役 1973.4.3

それは今までの環境とは大変違うので無理からぬことである。
 中川飼育課長、田代係長にお願いしてこれら雑音をたてる動物を、遠くへ移していただいた。そして検査舎にはロープを張り立入りの規制、検査舎横の通路は、必要最少限の車両以外は通行止めの便宜を計って下さった。
 しかし、スピーカーの声や雑踏の音まではどうしようもなかった。
 その日の二頭の糞の状態はかんばしいものではなかったが、雑音をできるだけ排除したので、食い込みがのびてくれるよう期待して宿に向つたのは午後十時であった。
 翌日から太郎の食い込みはのびはじめ、糞の状態も上向いてきたが、辰子の方は食い込みは良いが、糞の状態はもう一歩というところである。
 飼料の増減を試み、二頭の状態が正常になったのは三月三十一日であった。
 飼料は大町にいた時より約十パーセントから二十五パーセント押えた量である。
 この状態を四月三日の出発の日まで持たせなければならぬ。
 狭い飼育場で殆んど運動らしいこともできないので、いつ体調が崩れるかと気が気ではない。
 しかし、この調子は三日の日まで続き、私をほつとさせた。
五、さようなら太郎・辰子
 四月二日、中川飼育課長を囲んでカモシカの輸送箱への収容の時期と方法についての検討会が開かれた。
 そして、収容開始は二日の午後十時と決められた。
 それは翌朝早々に収容作業をはじめた場合万一、失敗し飛行機の出発時間に間に合わないことを恐れたこと、収容してすぐ輸送をはじめると、早くに収容し箱の中で休息させた方が良策であろうと考えたからである。
 収容の方法については、飼育課の若い人の

中にはタツクルの強行論もでたが、動物を傷つけず、おびやかすことの少ない方法、シートを作つて輸送箱に接続する、いわば習性を利用して、半自動的に収容しようという方法をとつてもらうことになった。
 この方法はみごとの中し、収容時間は辰子一分三十秒、太郎においては測定する間がないほどの短時間で、時間を計っていた中川飼育課長を喜ばせた。
 出発の当日、前日雨がバラついたので心配していたが大丈夫のようである。
 午前五時三十分、輸送用のトラックと先導のバスが到着して、カモシカと、フンボルトベンギンを積みこんで出発するだけである。
 積み込む前に測定した太郎の体重は三十・五キロ、辰子は二十四・二キロであった。
 午前六時、輸送車は赤い標識灯をつけたパトカーの先導で羽田国際空港へノンストップで突っ走り、三十分後には税関前に到着した。
 そこでは、太郎・辰子の見送りと、大町市



特別機に積み込まれる 1973.4.3

長の大町市長宛のメッセージ、記念品目録をパイロットに託すため、大町から、伊藤真雄議長、江津茂助役、五十嵐水卵教育委員長、金原文雄山岳博物館長が出迎えてくれた。
 石内上野動物園長、江津助役が日航、全日空のパイロットに目録を託す簡単なセレモニーが、カモシカ・ベンギンの輸送箱の前で行なわれ、カモシカとベンギンは一箱づつ、二機の特別機に積まれた。
 大相撲の力士が機内に姿を消すと、やがて鋭いエンジン音を響かせて日航機は、二十番スポットを離れ滑走路へ、そして午前九時ちようど日航機は大空へ、続いて九時十五分、全日空機が飛び立つて行った。
 機体が大空に消え去ると、急に風の冷たさが身に沁みた。
 さようなら太郎、そして辰子、新しい地できつと可愛い赤ちゃんを産んでくれることだろうと私は思っているし、そうなつてほしいと願っている。
 産れた可愛い赤ちゃんは、きっと中国のよい子たちのアイドルになるだろう。
 最後に、お世話になつた長野県、大町の方々、日本通運、上野動物園、それにあなたたかいご声援をお寄せいただいた全国の皆様にご上より厚くお礼申し上げます。
 付記 負傷後の木曾生は一時健康をそこないましたが、現在は従来の元気に戻り、眼の方の傷も落ちついた様に見えます。今後の治療については各方面の方々と慎重に相談して進めるつもりです。
 (大町山岳博物館学芸員)

山と博物館 第18巻 第4号
 一九七三年四月二十五日 発行
 発行所 長野県大町市TEL.0261-2111
 印刷所 大町市下町山岳博物館
 大町市大町山岳博物館
 大町市大町山岳博物館
 定価 年額 四〇〇円(送料別)(切手不可)
 郵便振替口座番号(長野二二、二九三)